

〔最終講義〕

私の研究と教育 —37年間を振り返って—

藤 崎 宏 子

1. はじめに

定年退職にあたって「最終講義」という機会をつくってくださり、さらに、たいへん多くのみなさまにお集まりいただいたことを心よりうれしく思っています。このような場では、本来ならば、お茶の水女子大学在職中の17年間について語るべきかもしれません。しかし、定年を控えて過去を振り返ることの多い今、職業人としての自分の37年間の歩みをしっかりと心に刻んでおきたいという思いが強いたします。また本日は、この37年間の私の歩みの折々で交わり、導いてくださった大勢の方々においでいただきました。そのようなことから、やはりこの機に、37年間の全体を振り返っておきたいと思いました。

ただ、限られた時間ですので、「研究と教育」と銘打っても、「教育」に比重をかけたお話になることをお許しください。また、私がなぜ研究・教育の仕事に携わることになったかは、私の学生時代の経験と深くかかわっています。ですので、本日のお話は、まず、その前段の学生時代から始めさせていただきます。

2. 学生として

(1) 学部時代(1971年4月～1976年3月)

学部時代は東京教育大学(現・筑波大学)で過ごし、社会学を専攻しました。高校時代には、将来は福祉現場で働くことをめざしていました。このため、社会福祉の学部、学科への進学がもっとも順当な選択だったのですが、当

時の私は少々ひねくれ者でした。いずれ職業として福祉現場に出るなら、大学ではもう少し幅広く学びたいと考え、社会学専攻を選んだのです。「社会学」とは何たるかを知らないまま、イメージだけで選んだというのが正直なところです。入学は1971年度。1960年代後半の大学紛争の大きなうねりは終息していたものの、いまだキャンパスにはたくさんの立て看板が並び、ヘルメット姿の学生たちのシュプレヒコールが響き渡っていた時代です。

福祉の仕事をする前提として社会学を学ぶ——その期待は、入学後ほどなく的外れだと気づきました。専門の授業はどれも興味をひくものではなく、さまざまな社会事象を記述・分類し、その成り立ちを説明することに留まり、「役に立たない」知識としか感じられませんでした。社会福祉の、とくに現場実践に関心をもっていた私は、社会学に対して、目の前の問題を即解決するための処方箋の書き方を教えてくれるものという勝手なイメージをつくりあげていたのです。次第に私の足は教室に向かなくなり、授業をさぼることに罪悪感を覚えなくなりました。それでも私は、単位を取る処世術だけは身につけ、4年目にはあとは卒論さえ書けば卒業できるという見込みをもてるところにきていました。

しかし、この卒論が私にとって大いなる鬼門でした。まず、専門的な文献を読んで理解するところで躓きます。さらに、そこから得た知識・情報を自分の問題意識の枠組みのなかで整理し組み立てるなどということは、とうてい達成不可能な高いハードルだと思えました。

あれだけ不真面目な学生だったので、当然のことです。400字詰め原稿用紙を前にして、1日頭をひねっても1枚も書けないという日もあり、卒論の締切日まで無為な時間が過ぎていきました。一刻も早く社会学教室から抜け出すというゴールは明確だったものの、手も足も出ないまま、5年目を迎えることになりました。

学部5年目には、覚悟を決めて、専門書や論文をとにかくわかるまで読むというところからスタートしました。最初の内は何度読んでも理解不能だったものが少しずつ読み解けるようになり、論文の「構想を立てる」「書く」ということのイメージもぼんやりとながらもてようになりました。そのような経験のなかで、私は初めて「社会学は面白い」と思いました。かつて、さまざまな社会事象を「記述・分類し、説明するだけ」と思えた社会学の、「説明する」ことの意義に遅ればせながら気づいたのです。同時に、過ぎてしまった5年間のなかで何も学ばなかったことに強い後悔の念を覚え、それまではまったく思ってもみなかった、「大学院進学」をめざすようになりました。

(2) 大学院修士課程（1976年4月～1978年3月）

しかし、私の学部卒業の見込みが立った1975年度には、すでに東京教育大は筑波大学への移行途上にあり、学部・大学院ともに学生募集が停止されていました。このため、他大学の大学院への進学を考え、お茶の水女子大学家政学研究所を進学先として考えるようになりました。東京教育大は、茗荷谷の現在の筑波大学サテライトキャンパスのある場所にあり、お茶大には勝手に親近感を抱いていました。また、家族社会学を専門とされる袖井孝子先生や湯沢雍彦先生がおられるということを知り、お茶大をめざした理由でした。

大学院進学の原因は、学ばなかった過去を取り戻す、学部生活の最後になって初めて面白いと思えた社会学の学びをもう少し探求したい、というきわめて素朴なものでした。今日とは異

なり、「4年制大学卒」という資格にはいまだ希少価値のある時代だったこともあり、そのような気持ちが満たされたら、あるいは生活が成り立たなくなったら、高望みさえしなければいつでも就職できるという安心感もありました。

ただ、このような私の進学希望は、学部時代の落ちこぼれぶりから見れば、突飛な思いつきだと思われたのも当然です。大学院受験の必要書類の一つに指導教員の推薦状があったため、教育大の森岡清美先生にお願いにうかがったところ、とても驚かれて、研究者として生きていくことがいかに大変かという話を懇々とされました。そして、婉曲な表現ながら、進学という選択は無謀ではないかといわれました。この森岡清美先生は、戦後日本の家族社会学の発展を牽引され、国際的にも著名な日本の代表的社会学者だということも知らないぐらい、私は無知でした。もしも知っていたら、大学院進学に向けて突き進む前に挫けてしまったかもしれません。そう考えると、私の今日があるのは無知が幸いしたといえるのかもしれませんが。

幸いにして、入学させていただいたお茶大大学院修士課程では、とても充実した時間を過ごさせてもらいました。希望通り袖井孝子先生に師事し、ゼミでは家族社会学・老年学関係の文献をワクワクしながら読みました。また、袖井ゼミにはたくさんの院生がおり、研究テーマはさまざまでしたが、それぞれの関心を尊重して、自由な雰囲気の中で育てていただきました。さらに在学中には、袖井先生を通して、副田義也先生（筑波大学）、一番ヶ瀬康子先生（日本女子大学）、そして袖井先生が以前在職しておられた東京都老人総合研究所（現・東京都健康長寿医療センター研究所）の直井道子先生、岡村清子先生などを紹介していただき、さまざまな研究会にメンバーとして加わるよう仲介していただきました。袖井先生が繋いでくださった人の縁は、その後の研究生活の折々で、私を支え、新たなチャンスを拓いてくれました。40歳代半ばになったころ、それまでの研究をまとめて博士論文にするようにと勧めていただき、審

査会の主査まで務めてくださったのは、この時お近づきになれた副田義也先生でした。

もう一つ、お茶大時代の財産は、先輩や後輩も含む院生仲間の繋がりです。みなで読書会を立ち上げ、E. デュルケムなどの社会学の古典を読み、当時お茶大文教育学部におられた宮島喬先生にお願いしてレクチャーをしていただいたこともあります。また、当時の米国における家族研究の到達点ともいえる、W.R. バーらによる編著書を根気強く読み解いたりもしました。この読書会は、メンバーがお茶大を離れた後もしばらく継続され、みずから主体的に学ぶ、仲間とともに学ぶことの大切さを実感する貴重な場となりました。また、教育大で最後の文学部長を務めておられた森岡清美先生が、中央大学に出講し担当されていた大学院ゼミに、読書会仲間5、6名と大挙してモグらせていただいたことも懐かしく思い起こされます。今思えば図々しいことはなはだしいのですが、若さゆえにできたことだと思います。

(3) 大学院博士課程（1979年4月～1981年6月）

こうして充実した修士課程を過ごし、修士論文も何とか書き上げ、そしてふたたび進路について悩むことになります。いまだ、研究・教育者になるなどの目標を見定めていたわけではありません。そもそも自分にそのようなことが可能だとは到底思えませんでした。一方で、高校時代から考えてきた福祉現場への就職は、一つのイメージとしてもち続けていたものの、少々距離感を感じるようになっていました。そして、いざとなったら学部卒資格で就職するという決着のつけ方を最後の拠り所にしながら、好きなことを好きなようにできる環境の楽しさに惹かれ、博士課程進学を考えるようになりました。

お茶の水女子大学では、私が修士課程に入学した年に人間文化研究科という博士課程の研究科が創設されました。その研究科は、3つに分かれていた修士課程研究科全体の上に単一組織として載るということから推測されるよう

に、学際的な性格のものでした。このため入学した院生は、しばらくの間、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えて全員が同一科目を学ぶというコースワークが課せられており、興味あることを徹底的に学びたいという私の期待に応えてくれるものではありませんでした。

そこで、ふたたび他大学の受験を考え、東京都立大学の社会科学研究科を受験することにしました。袖井先生も都立大大学院のご出身であり、受験を勧めてくださったことも心強く思いました。しかし、1978年度の受験は失敗。自分の力のなさを痛感しました。ここで博士課程への進学を断念してもよさそうなものですが、翌年再チャレンジして、何とか合格をさせていただきました。いけるところまでいっても失うものは何もないと思っていたことで、落ち込むことなく進むことができたのだと思います。

博士課程院生の生活は、修士課程の時代に輪をかけて枠組みのない自由なものでした。今日とは異なり、課程在学中に「博論を書く」「学位をとる」ことはまったく想定されていなかったもので、明確なゴールもありませんでした。ただ、周囲の院生仲間やはり研究職として生きるという目標をもっていましたから、自分もひょっとしたらそのような生き方ができるのかもしれないと考え始めていました。ただし、研究職としての就職過程や、研究者の生活がどのようなものかは皆目見当が付きませんでした。

枠組みや明確な目標のない博士課程の時代ですが、修士課程と同様に、好きなことができる楽しさを謳歌できる時間でした。いくつかの機会に、論文らしきものを何本か書きました。また、都立大大学院は理論社会学に並んで都市社会学が強く、先生方が率いる大型プロジェクトの調査員として社会調査の経験を積ませてもらいました。多摩ニュータウン調査、神津島調査などに同行し、社会調査について実地で学びました。また、当時在学していた院生たちで、『社会学論考』という院生誌を創刊しました。この雑誌は現在に至るまで継続的に刊行されており、これはとてもうれしいことです。

3. 職業人として、最初の10年

(1) 東京都立大学の社会福祉学原論講座助手 (1981年7月～1986年3月)

博士課程3年目の春、指導教員の小林良二先生から、「都立大に新しく社会福祉の専攻をつくることになった。まずは講座が一つできるので、その助手のポストに応募してみないか」という、思いがけないお声掛けをいただきました。私の研究テーマは、修士課程の時代は母子寮問題でしたが、博士課程では高齢者研究に着手し始めていました。距離ができたとはいえ、どこかですっと引きずってきた「福祉現場で働く」という思いを、社会学の研究として活かせるのではないかとほんやり考えていたがゆえのテーマ選択でした。そうした私の研究テーマが、社会福祉学に近いことをやっているとみなしていただくきっかけになったのでしょうか。いまだ研究・教育者としての自分を想像できない状況でしたが、後には引けず、ともかくも面接に臨んだところ、採用していただけることになりました。1981年7月1日のことです。

都立大の社会福祉学専攻は、いわゆる講座制という組織形態を採り、最終的には教授・助教授・助手の3名からなる講座が3つ、計9名のスタッフで構成される予定でした。しかし、予算や人事手続きの関係から、1名ずつ順次採用されていき、私が所属していた社会福祉学原論講座も、私に次いで小林良二先生が社会学専攻から移籍され、翌春に大阪市立大学から星野信也先生を教授としてお迎えして、完成するまでに約1年を要しました。もともと手狭な目黒校舎には新たに研究室を確保する余裕もなく、教授会を開催する大会議室の一角をパネルで区切って机を3つ並べただけの仮住まいの研究室でした。何もないガランとした部屋の環境を整えるため、急須と湯呑茶碗を買いにいったのが、助手としての最初の仕事でした。

その後も順次教員が採用され、私の在職中に9名のフルメンバーが揃いました。しかし、社会福祉学が「専攻」という単位で独立したのは

1987年で、私が都立大を離れて以降のことです。それまでは、社会福祉学教室としての学生定員はもてず、社会学専攻の定員の一部を「借りる」というかたちで学生教育をおこなっていました。その人数は1学年3名程度のもので、専門課程の演習なども2、3名の学生に対して、助手まで含めて教員が全員出席して指導するという形式で、今思えば、学生にとって恵まれているというより圧倒的な教育環境だったと思います。院生指導についても、社会学や教育学・心理学などの隣接領域の院生が研究室に出入りすることはあっても、プロパーの院生はいませんでした。

このように学生教育にかかる時間的・労力的な比重が小さかったために、おのずと研究のための時間が多くありました。といっても、個人研究ではなく、教授・助教授の先生方が組織される研究会への参加や科研費による調査研究のお手伝いなどが中心です。先生方は、都立大に社会福祉学という新しい学問を根付かせようと熱意をもって共同的に研究に取り組んでおられました。全国自治体の社会福祉行政に関する調査、1983年三宅島噴火災害後の復興過程に関する調査研究、高齢者福祉施設のケアの在り方に関する研究、武蔵野方式とも呼ばれる有償在宅福祉サービス提供システムに関する調査など、現場を訪ね、当事者の方からお話を伺う調査研究を数多く経験しました。このため、在職した5年間には、ほんとうに得難い経験を数多くさせていただきました。私自身は社会福祉学の専門的な教育を受けてはいないのですが、後に社会福祉学関係の授業をもてるようになったのは、この期に「門前の小僧」として学ばせていただいたおかげだと思っています。

(2) 東京都立医療技術短期大学の一般教養科 講師 (1986年4月～1991年3月)

都立大助手は「3年任期」という年限はありましたが、まったく緩いもので、「いたければいつまでもいてもいいよ」ということばに甘えて、のびのび過ごさせていただきました。プラ

イベントでは、この間に結婚と長男の出産を経験しています。一方で、さすがにここまで来たら、将来的にもこの道で生きていくしかないという覚悟もできていました。そのような折、所属講座の教授である星野信也先生から、「今度、荒川区に医療技術系の都立短大が新設される。そこの一般教養科の講師に応募しないか」というお話をいただきました。都立大助手時代は、大学院生の延長上にあるような生活だったのですが、独立した研究・教育者として生きるチャンスを与えていただいたのです。

1986年4月に開校した東京都立医療技術短期大学は、看護学科、理学療法学科、作業療法学科、診療放射線学科の4学科からなる、3年制の短期大学でした。私は一般教養科に所属し、社会学、社会福祉学などの一般教養科目を担当しました。医療系の学生たちは、入学時から3年後の国家試験の受験をめざし、多岐にわたる専門科目をこなし、膨大な知識を覚えこんでいかなければなりません。また、実習の回数や種類も多く、その期間も長期にわたります。このため、社会学や社会福祉学などの一般教養科目は、ともすると「休憩時間」にもなりかねません。どのような授業をすれば学生の関心を惹きつけられるのか、また、どのような内容ならば、将来医療現場で専門職として働く際に役立つのかを考えました。

授業準備で自分なりに心がけたことは、学生にとって身近な経験やトピックを取り上げ、その背景や問題構造を考えていく過程で社会学の考え方が有用だ、面白いと実感してもらうことでした。このため、医療や看護の現場で起きていることに関する勉強は、自己流ながらしました。例えば、医療専門職と患者の関係、病をかかえつつ生きる患者の生活全般、また病院や施設の組織構造と運営、社会変動と保健・医療や福祉の在り方との関連等々、いずれも社会学の考え方をベースにわかりやすく説明するよう心掛けました。それでも、まだまだ駆け出しの教員であったため、理想として考える授業と、実際の授業の間には大きなギャップがありました。

なお、医療技術短期大学在職中には次男を出産しましたが、長男の時と同様に、育児休業制度などない時代だったので、産後2か月で職場復帰しました。同業者である夫との家事・育児分担、そして周囲の方たちからのさまざまなサポートがあったからこそ、子育てと仕事の両立についても何とかやってくることができたと思います。

これは私が離れて以降の話になりますが、都立医療技術短大はその後4年制の都立保健科学大学に改組されます。さらに、八王子に移転した都立大は、石原慎太郎都政下の2005年には、都立保健科学大学や他の都立短大なども含めて、「首都大学東京」として統合されることとなります。私が都立大、都立医療技術短大に在職していたときにも、大学組織やその下部組織がつくられ、改組される過程を間近でみることはできましたが、これは大学人として貴重な経験だったと思います。

4. 聖心女子大学での10年（1991年4月～2001年3月）

都立医療技術短期大学への在職中、都立大社会学教室でお世話になった石原邦雄先生から、聖心女子大学で社会学の教員を探しているのだが、応募する気持ちはないかというお声掛けをいただきました。ありがたいお話でしたが、学生としても教員としても私学の経験はなく、ミッション系についても未知の世界でした。さらに、メディアなどにより流布される「お嬢様大学」のイメージにも影響されていたのですが、自分が聖心にうまく収まるのかという不安も覚えました。ただ、医療技術短大では一般教養の範囲内でしか教育できないことに飽き足らなさを感じていたことも確かです。そこで、思い切ってこのお話を受けることにしました。1991年4月のことです。

聖心女子大学での所属は、文学部歴史社会学科人間関係専攻でした。本専攻は、宗教学、文化人類学、社会心理学、人格心理学を専門とす

る4名の教員により構成される学際的な教育組織でしたが、ここに新たに社会学の分野を加えることになったのです。聖心女子大学は、聖心会という女子修道会により創設された専門学校を母体として、お茶の水女子大学と同じく1948年に新制大学として再スタートしましたが、人間関係専攻はその後1972年に歴史社会学科に増設された教育組織です。この時にも、専門分野の一つとして社会学系の教員を採用するという話はあったようですが、「社会学」という学問分野への誤解に基づく反対——社会主義と結びついた危険思想である——もあって、実現しなかったという話を後日聞きました。社会学系の教員の採用は、そこから20年が過ぎて実現したものです。

ただ、実は私の採用に当たっては、学内の一部では懸念もあったという話を後日聞くことになります。それは、私が研究・教育にあたって旧姓使用を希望したことで、校風に合わないフェミニストだと警戒されたためだということです。今から振り返ると、いかにも旧態依然とした発想ですが、1990年前後という時代には、いまだそうした考え方も珍しくはありませんでした。このときは、聖心の先生方と繋がりがあった私の知り合いの先生方が、人物的に「大丈夫」「問題ない」ととりなしてくださったという話も、だいぶ時間がたってから伺いました。これは私が聖心を離れて以降のことですが、学科・専攻を越えて履修できる副専攻として「ジェンダー学」が立ち上げられるなど、今では聖心も大きく変わりました。そして、私は現在、副専攻「ジェンダー学」の一科目を非常勤講師として担当させていただいています。

ともあれ、私は聖心に受け入れていただけることになりました。私はそれまで10年の教職キャリアがあったとはいえ、教養部分での教育や専門教育の補佐的な役割を担当していたに過ぎなかったため、学部の専門教育に携われることには心躍るものがありました。ただし、これまで聖心には社会学の専任教員がいなかったこともあり、社会学教育の素地がないところで社

会学を教えるにはどうすればいいのかということに頭を悩ませました。

しかし実際に聖心での教育が始まると、「案ずるより産むが易し」。学生たちはとにかく元気で食いつきがよく、かつ真面目で優秀でした。私の「お嬢様大学」という根拠ない思い込みはすぐに打ち砕かれることになります。ミッション系という点についても、キリスト教信者や、中高はミッション系学校の出身者という学生も多くいましたが、実にオープンマインドで心根が優しく、宗教教育のよい効果なのだと実感できました。まだまだ教師として未熟だった私は、彼女たちとのやり取りのなかで、また先輩の先生方との交流や支えによって、教師として鍛えられ、育てていただきました。

とくに専門課程の3年ゼミ、4年ゼミでは、初めての卒論指導を経験しました。「社会学ゼミ」ということで、幅広い関心をもつ学生を受理、卒論の完成まで2年間の学生生活に寄り添いながら、自分なりの論文指導の方法を確立することができたように思います。この経験があったおかげで、後にお茶の水女子大学に所属が変わり、学部の卒論のみならず、修士論文、博士論文の指導をするようになって、基本は変わらないのだという確信のもとに学生指導に当たることができました。聖心での10年間は、教師としての自分の基盤をつくる、とても貴重な時間になりました。

しかし、当の学生たちは私の指導をどのように受け止めていたのかは、少々心もとないところがあります。聖心は私学にしては少人数教育ができる恵まれた環境にありました。ゼミ生も各学年平均10人程度なので、丁寧に手をかけ目をかけることが可能な範囲です。4年生になり卒論指導が佳境に入ってくると、学生のほうから質問や相談にくるのを待ちきれず、自分から進捗はどうなのかを尋ね、適宜呼び出しては指導をしていました。今と違って携帯電話などない時代なので、「週間予定表」を提出させ、各学生の大学での行動パターンを把握して、授業後につかまえるなどストーリーまがいのことも

やっていました。実に「暑苦しい指導」だったと思います。おかげで、お茶大に移った後は、学生の自主性を重んじつつ、ほどほどに手を抜くこともできるようになったのかもしれない。

学生たちとはよく飲みにいき、ゼミ合宿でも夜は必ず宴会になるという、藤崎ゼミの伝統はこのころからのものです。「暑苦しい指導」につきあってくれた聖心の117名のゼミ卒業生たちには、ただただ感謝です。

5. お茶の水女子大学での17年（2001年4月～2018年3月）

(1) ふたたび母校へ

こうして、聖心で充実した時間を過ごしていましたが、思いがけず恩師の袖井孝子先生にお声掛けいただき、今度は教員という立場でお茶大に呼んでいただけることになりました。2001年4月のことです。学生として過ごしたのは修士課程の2年間だけなので、「母校」という表現は適切ではないのかもしれませんが、ただ、わずか2年間であっても、学ぶことの楽しさを実感し、振り返ってみれば、その2年間があったからこそ曲がりなりにも研究・教育者としてその後を歩んでいくことができたのだと思います。お茶大を離れ、所属や立場はさまざまに変わりましたが、指導教員であった袖井孝子先生、そして湯沢雍彦先生からも、折に触れてお声掛けいただき、いろいろな仕事の機会を与えていただいたりもしました。また、修士の学生時代にともに学んだ友人のみならず、その後お茶大を介して知り合った先輩や後輩との繋がりも密なものがありました。かなり代が離れていても、学会などで出会い、お茶大出身だということがわかると一気に親しくなれるのは、本学のネットワーク力の強さだと思います。

そのようなことから、修士の院生時代から四半世紀の時を経て、ふたたび立った本学のキャンパスには時の流れを忘れさせてくれるなつかしさを感じました。所属は生活科学部人間生活学科生活社会科学講座で、かつての家政学部家

庭経営学科が改組されたものです。恩師の袖井孝子先生も現職でおられたので、先生がご定年になるまでの3年間は同僚としてご一緒させていただくこともできました。また、修士課程在学中の1年先輩・御船美智子先生とも同僚として一緒に過ごさせていただきました。その御船先生が、2009年2月に亡くなられたことは、お茶大在職中のもっとも悲しい出来事でした。

さて、外観や雰囲気は馴染み深い母校も、当時はちょうど大きな岐路に立たされていました。入学資格を女子のみに限る国立大学への批判、また、国立大学の統廃合や独立法人化などの改革に向けて、大きく舵を切ることを求められた時代でした。着任初年度の教授会では、国立大学の統廃合が大きな争点になっており、お茶大はどの大学と統合されるのか、あるいは統合してもらえるのかという話題が出て、戻ってきたばかりのお茶大がなくなるのかもしれないとショックを受けたことを印象深く覚えています。

しかし、幸いにもそのような事態には至らず、お茶大として存続していくという方針が堅持されることとなります。着任翌年の2002年には21世紀COEプログラムの採択を受け、このプロジェクトのメンバーに加えていただいたことにより、所属や専門を越えて多くの先生方とお近づきになれましたし、大学の在り方を知るよい機会になりました。また大学院重点化の流れのなかで、人文・社会科学系院生も増加し、課程在学中に博士学位の取得を強く求められる時代に入っていきます。私自身の仕事のなかでも院生指導の比重が徐々に増していきましたが、自分の教師としての成長ペースと足並みをそろえた変化であり、その流れに違和感なくついていくことができたように思います。

(2) 学部教育

学部の専門課程では、3、4年ゼミ生が合同でおこなう生活福祉学演習を中心に、家族関係論、社会福祉学、老人福祉論などを担当しました。袖井先生が定年された後は、老年学も担当しました。都立医療技術短大、聖心女子大で授

業担当をした際には、社会学系教員は一人という環境のなかで、「社会学的なものの方見方・考え方」を教えるにはどうすればいいのかを自分なりに考えました。そのころは、社会学教育の方針に関する判断や決定を自分の一存でできたということでもあります。お茶大では、学部の所属である生活社会科学講座には、着任時は袖井先生、牧野カツコ先生がおられ、それぞれに異なる専門への広がりをもっておられたとはいえ、家族社会学という領域においては重なり合うところがありました。このため、一つの教育組織のなかで、どのようにして先生方と担当分野を差別化して棲み分けるかということも考えました。

その後、2004年には袖井先生が、そして2006年には牧野先生が定年され、牧野先生のご後任として石井クンツ昌子先生が着任されて、この課題は今日にも引き継がれています。また、受験生などからはしばしば質問を受けるのですが、文教育学部社会学コースの先生方との位置関係をどう整理するかも、改組案が出るたびに浮上してくる問題です。ともあれ、生活社会科学講座は、社会学のみならず、経済学、法学、政治学の社会科学4領域の教員により構成され、学際性を特徴とする講座です。社会学もこうした他の社会科学領域の科目とのコラボを通して、複数のアプローチにより社会事象を複眼的に考察することで、より豊かな知見がみいだされることを学生に伝えたいと考えました。

実際のゼミ運営や卒論指導に関しては、先にも述べたように、聖心女子大時代に自分なりに作りあげた方法を若干修正しつつ適用できると感じました。ただし、これもすでに述べたように、過剰な介入はせず学生の自主性に委ねることも大事だと自覚して、ほどほどに抑制できるようになったのではないかと自分では思っています。今回の最終講義に向けて、私が指導したゼミ生の卒論リストをつくってみました。こうして卒論タイトルとともにゼミ生の名前を書きだしてみると、一人ひとりについていっそう鮮明にさまざまな思い出が蘇ってきます。在

職した17年間には、124名のゼミ生と密度の濃いつきあいをさせてもらいました。

(3) 大学院教育

論文指導まで含む本格的な大学院教育は、お茶大着任後に初めて経験しました。ただ、すでに述べたように、社会科学分野では、私がお茶大に着任した2000年代に徐々に院生教育の比重が増していったので、比較的無理なくこの流れについていくことができたように思います。また、博士前期課程・後期課程ともに着任1年目からゼミを開講したとはいえ、主指導で院生を受入れたのは数年後でしたから、ちょうどよいウォーミングアップ期間になりました。当時のゼミは少人数だったこともあり、本来の講義や研究指導以外にいろいろおしゃべりもし、大学院の様子や院生の生活の様子などを教えてもらうこともできました。

まず博士前期課程については、着任数年後から毎年1~3名の院生を受入れるようになりました。お茶大出身者は少なく、他大学からの進学者が圧倒的に多かったです。年代は学部からストレートで進学してくる人だけでなく、社会人経験をもつ院生も少なからずいました。外国人留学生、とりわけ中国からの留学生も多くいました。その意味では院生のバックグラウンドは多様でしたが、研究室の人間関係は和気あいあいとしていました。在職中に主指導をし、修士の学位を取得した人は24名でした。

前期課程院生の場合、たいていは2年という限られた時間のなかで着実に研究を進め、学位を取得していきます。論文執筆の作業は、卒論ともそれほど変わらないスケジュールのもとに進行します。しかし、後期課程院生の場合は、3年という標準的な在学期間では到底論文完成には至りません。着任早々にとくに印象的だったのは、他研究室のある後期課程院生から、「ドクター進学をしたもののどのように勉強したらいいかわからない」、「何を目標にすればいいのだろうか」、「博士論文はとて書けそうにない」などと悩みを訴えられたことです。また、同じ

ころ、人間発達科学専攻の後期課程院生全員の連名で、同専攻の全教員に対して「話し合いの場」を設けてほしいという要求が出されました。私もその集会に参加しましたが、そこでは、後期課程の教育に対する不満や戸惑い、要望などが赤裸々に語られ、研究者養成を目標とする院生指導の難しさを痛感させられました。

2000年代初頭という時期は、1990年代から文部省が推進した大学院重点化が実体化し、大学院は「広き門」になっていました。とはいえ、とくに人文・社会科学系分野では、課程在学中に論文を書き博士学位を取ることは、なお高いハードルでした。お茶大の私の所属組織、専門分野に限っていえば、課程在学中に学位取得をめざす動きが本格化し始めるのは、2000年代も半ばぐらいからではないでしょうか。また、本学もしくは他大学の修士課程修了者が、10年、20年経って論文博士として学位を取る、あるいはすでに研究職として就職している人がその籍を確保したまま後期課程に再入学するなどの動きも目立ち始めます。ただ、課程博士も論文博士も、志はあってもゴールに到達する前に断念せざるをえない人も少なからずおり、残念なことだと思っています。たしかに、前期課程とは異なり後期課程の場合は、どのようなステップを踏んで学位取得のゴールに到達するかの道筋は必ずしも明確ではない現状があるのですが、あきらめずに最後まで走りきってほしいと願っています。

さて、私の在職期間に主査を務めた博士論文は16本、内、課程博士は10本、論文博士は6本でした。それぞれに長期間に及んだ論文執筆の過程や、審査会でのやりとりが生々しく思い起こされます。また、副査として、あるいは審査委員として審査過程にかかわった論文は36本でした。他大学の博論審査の外部委員の経験も入れれば、39本になります。主指導・主査の場合はもちろんですが、副査や審査委員であってもその役割には重みがあります。ただ、博論審査は、実は「審査」というより「研究指導」の過程であり、最初に提出された論文がどんどんブ

ラッシュアップされていくのを目の当たりにしながら、これに伴走できることはワクワクする経験でもありました。お茶大17年の在職期間中でもっとも印象的なこと、楽しかったことは何かと問われたら、躊躇なく「博論指導」と答えるでしょう。

なお、院生とのかかわりは博論指導に特化したものではなく、日常的な研究指導に加え、交流そのもの、おしゃべりそのものも存分に楽しませてもらいました。私の「Dゼミ」は、通年・隔週の開催で、1回のゼミは4、5時間続きます。そこでは、メンバーの投稿論文草稿の検討や学会発表の予行、そして博論構想の検討などをおこないます。教員一院生の個別指導も重要ですが、こうした集合的な場とピア関係のなかで発揮される教育力はたいへん大きなものがあると実感しています。Dゼミのメンバーも、私の研究室の院生のみならず、他研究室の院生、OG、他大学院生など、徐々に広がっていき、メーリングリストを作成して連絡等に活用していましたが、最終的には登録者が60名近くにのぼっていました。国内遠隔地や海外に在住して参加することが難しい人も増えていきましたが、いつでも繋がることのできる、情報を共有できるというだけでも、私にとっても院生にとっても貴重な交流のメディアになっていました。

(4) 附属幼稚園長として

2014年度には、思いがけず附属幼稚園長の要職を拝命し、最後の4年間を務めることになりました。お茶大の他大にない特徴の一つとして、いずみナーサリー、こども園を含め、幼小中高の附属学校園がすべて同一キャンパス内にあるということがよくいわれます。私ももちろん、大塚キャンパスの附属学校園の存在は目に入っていたものの、附属学校園の教育はどのようなものか、附属学校園と大学教育との関係は、といったことを考える視点は正直なところありませんでした。それでも、一定のカリキュラムやプログラムのもとに進行する小学校以上の教育については、まだ想像の範囲内でもあります。

しかし、幼児教育については、まったくといっていいほど無知でした。

そのような私に「園長」という仕事を務まるのかは、はなはだ心もとないところでした。当初は、会議、行事の際のご挨拶、来客時に責任者としてその場にいることぐらいしか、かかわりの接点をつくることができませんでした。しかし、それではやっぱり何もわからない。幼児教育、そしてとりわけお茶大附属幼稚園の教育は、自由なあそびを通して子どもの自主性や創造性、個性を育むことを旨としています。実は綿密な保育計画や歴史のなかで培われてきた伝統がベースにあるとはいえ、表面だけ見れば、筋書きのないドラマのような幼稚園の生活を理解するためには、ともかくもその場に身おいてみるところから始めなければと思いました。就任して1、2か月経ったころから、朝9時の登園時のお出迎えに始まり、午前中の数時間を園で過ごす生活が日常となりました。

1年目はすべてが初体験で戸惑うことも多くありましたが、それでも春夏秋冬の四季に添って展開していく幼稚園の生活サイクルを一通り経験したことで、2年目以降は少しずつ先を読みながらかかわりをもつことができるようになりました。こうして4年間を過ごしたなかで、2016年度には幼稚園創立140周年の周年行事もあり、日本で最初の幼稚園である本園の歴史とその意義を学ぶ機会もいただきました。その一方で、本園に限らないことですが、国立大学附属学校園がおかれている存続の危機、現況の厳しさ知り、無力感を感じることもしばしばでした。子どもたちが楽し気に過ごし、のびやかに育っていく園の日常と、文科行政から国立大附属学校園に発せられる要請との間には、大きなギャップを感じてきました。

ただ、何はともあれ、子どもたちは理屈抜きに可愛いです。園で過ごす時間、子どもたちの様子をただ傍らでみている。そうすると、子どもたちのほうからいろいろと話しかけてくれます。それまで私は、子どもたちはそばにおとながいて、「遊んで」とか、「遊ぼう」と声掛け

してくるだろうと思い込んでいたのですが、この子どもたちは違います。「園長先生も遊んでいいよ」といいます。私がうらやましそうにみていることを感じ取っているのかもしれない。でも、それ以上に、子どもたち一人ひとりが、自分が好きなこと、やりたいことがはっきりしているからなのだと思います。

4年間の園長としての生活では、園の教職員のみならず、他附属の校長・副校長先生を始めとする先生方、全国の国立大学附属学校園の先生方、そして何よりたくさん子どもたちとその保護者の方たちとの豊かな出会いと交流がありました。そして、大学教員という一つの立場だけではなく、附属学校園のメンバーというもう一つの立場、これを構成する人間関係や環境にかかわらせていただいたことで、柔らかな心をもつことの重要性を再認識するとともに、生涯発達について考える上でも、多くの視点を与えていただいたと思います。

6. 振り返って思うこと

このたび最終講義の機会をいただき、私の歩んできた37年間で改めて振り返ることができたことは幸いでした。まず、もっとも強く思うのは、私は幸せ者だということです。学生時代の少々見当はずれの「独り相撲」のころを思い起こしても、私はけっして秀でた人材ではありませんでした。しかし、そんな私が曲がりなりに研究・教育者としてこの世界に身をおき、37年間を無事務め上げることができたのは、たくさん素敵な方たちとの出会いに恵まれ、折々にチャンスを与えられ、支えられ、導かれたからだだと思います。私が人を育てたというより、さまざまな方たちによって私が研究・教育者として育てられたのです。

たとえば就職や職場の異動については、結果的によいタイミングで、しかも、よい教育・研究環境に導いてくださる方が現れました。その意味では、大きな苦勞もせずに37年間の途が繋がりました。そしていずれの場でも、とても豊

かな人間関係に恵まれました。最近の研究職の厳しい就職事情のもと、悩み苦勞する院生たちの姿をたくさんみてきただけに、申し訳ないほど恵まれていたと思います。

こうしたキャリアのなかで、学部時代からこだわっていた福祉現場とのかかわりは、形こそ違え自分なりに探求できたのかもしれませんが、家族研究、福祉への関心、そしてこの両者の関連を考えるとという姿勢は、私の研究や教育の基盤となっています。もう少し一般化していえば、特定の事象に限定してこれを深く探求するというより、複数の事象、たとえば「家族」と「福祉」のあいだに何が起きているのかを考えるとという思考法にこだわり続けてきたのです。そのような過程で、時代や社会も大きく変わりました。博士課程在学中の1980年前後は、いまだ「高齢者研究に取り組んでいる」といっても、「若いのになぜ？」と不思議がられる時代でした。しかし、ご存知のように、今日ではそれはもっとも関心と呼ぶ社会的・政治的課題ともなっています。

もう一つ思うことは、社会学教育をおこなってきた環境についてです。私は、一度として社会学科、社会学部のなかで仕事をしたことはありません。都立医療技術短期大学、聖心女子大学の時代は、社会学専任は一人だけという環境でした。お茶大では複数の社会学者がいるとはいえ、所属しているのは学際的な社会科学教育をおこなう場です。このことは、自分の研究・教育者としての成長においてマイナス面もあったかもしれませんが、プラスが大きかったと肯定的にとらえています。とくに教育面においては、テーマや対象を絞らず、幅広く講じる必要がある。しかしそれも際限がないので、関心の糸口になる事象がどのようなものであれ、「社会学的なものの方・考え方」を教えることを大事にしたいという思いをもって取り組んできました。難しい課題であり、どこまでできたかは心もとないところですが、少なくともそれをゴールとしてめざしてきましたし、これからも考え続けたいと思っています。

さて、そろそろ終わりの時間が近づいてきました。本日は私のつたない思い出語りにおつきあいいただき、まことにありがとうございました。私が歩んできた37年間の職業生活の折々に、さまざまな形で支え、導いてくださったみなさま、ありがとうございました。みなさまのご健康とご多幸、そして、いっそうのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2018年3月16日、共通講義棟2号館101教室にて